

II—2

タイにおける日本研究

——パラダイムについての考察及び諸問題——

(議長 上山春平)

発表 スリチャイ・ワンガエーオ

タイにおける日本研究の現状とタイが直面している問題についての議論はタイ国内での知的状況に即して行わなくてはならず、タイと日本との関係が形成され始めた頃に起こった主要な出来事の背景を考えずには行えない。というのは、一九七〇年代の終りから八十年代の初めにかけての十年間にやっと、タイにおける日本研究の時代が始まったといえる、いくつかの進展があったからだ。貿易赤字や一九六〇年代後半の日本の投資の波、一九七〇年代の学生運動の高揚を与えた諸問題という背景を考えると、タイにおける日本以外の地域についての研究とは別に、この短い間の日本研究は前進したように思える。

この小論文で私は、パラダイムについての概念的、基本的な考察、日本研究の背景と現状、およびその変化しつつある認識上の、またイデオロギー上のコンテキストについてまず述べて、その後、パラダイムについての諸問題について述べたいと思う。

I 基本的な概念的考察

クーンにとって、科学者というのは常にものごとや世界を見る一般的な手段であるパラダイムの範囲内で仕事をすることになる。社会学で用いられる場合は、この言葉は曖昧

でもっと広い意味をもつようになって、社会学にかかわっている学派を指している。そうした一つ一つの学派は独自の方法論と理論をもち比較的自己充足した組織である。蓄積することで単純に発展していくという直線的進歩として科学の変化をとらえるというのが普通広くいきたった科学に対するイメージだが、彼はそうしたイメージにたいして一貫して異議を唱えているというのが主要な考えである。パラダイムについてのこの考えは同時に二つの要点、すなわち、認識の面と社会的面について述べている。

最初の要点はパラダイムというのは認識面での骨組になるものだということだ。クーンと同意見をもつメアリー・マスタートマンは、この言葉には二十一の違った意味があるが、それを三段階の意味に分類している。

一、最も広義な段階といえる形而上的または meta-paradigm な段階。これは「疑問の余地のない前提条件」である。

二、一九七〇年版の 'disciplinary matrix' とクーンが呼んでいるものは社会学的パラダイムと名付けられているものである。象徴的な普遍的な信念、価値、関連要素といったものを含んでいる規制があるコミュニケーションで分かち合っているコミットメントを意味している。これは規制全体のサブカルチャーでないかもしれないが、あるコミュニケーションの特別な

サブカルチャーとして見ることができるかもしれない。

三、「典型」というかマスターマンがアーティファクト「人工物」パラダイムとかコンストラクト「建設」パラダイムと呼んでいるものは科学的なコミュニティの中では具体的に形になったものである。非科学的なものが科学的になるということは活動を解くという謎に取り組むことである。しかし、謎を解くことは、もしあるコミュニティが具体的な謎の解明というか典型を共有している時のみ可能となる。

二番目の要素：パラダイムは社会構造も意味しているということ。同じように大切なことは、集合的に一つのパラダイムの中に追い込まれているグループの構造である。（クーン、一九七〇、一七六―一八一頁）特に、パラダイムが医者等の統合されたコミュニティを前提としている。進行中の謎解きは一つのグループしか存在しない場合にのみ起こる。調べている問題や用いられている方法についてあるコンセンサスが出てくるといったような一致した信念を分かちもつ。共同分析なしにはパラダイムの社会性は理解しえない。

それでは、知識の見通しについての社会学におけるパラダイムについてこの二番目の要素について考えてみよう。タイにおける知的探求の分野としての日本研究の発展を考える際に、私はR・K・マートン（一九五九、一九七〇）に従って行いたい。彼は、規律の発展過程には三つの要素があると言

っている。それらは、

一、日本研究が先行している規律からは、タイの知的正統性を主張している地域研究からは異なっていること。

二、制度上の正統性ないしは学術的自主性を確立するための探求。

三、この努力が多少でも成功しているのが証明される場合には、タイの知的関連の中で、他の社会科学や人文科学とともに、日本研究の再強化に向かつての動きがあるだろう。

R・K・マートンによれば、規律の発展過程は三つの質問をすればわかるはずだということになる。すなわち、まず第一に、そうした考えは正しいと考えられるようになったのはどうしてか。二番目に、日本研究はタイ―日本関係の構造やその構造が発展してきたタイ社会の構造によってどのように影響を受けたか。そして三番目に、社会の発展と日本研究者の間で社会の相互作用が、国内、国外でこの分野の外形の変化にたいしてどのような影響をあたえたか。

II 歴史的背景と現在の状態

パラダイムについての問題点を考察する前にタイでの日本研究の背景と現在の状態について考えてみるのが適当だと思う。日本研究の歴史的背景に関しては、ディシプリンとして

の日本研究はタイの人々が日本に関心をもつようになってからスタートしたのは当然のことだとは言えない。全面的にとは言えないけれど、大学の研究施設に関連した過程としての現象を見ると、四つの時期に分けなくてはなるまい。すなわち、研究前時期、アジア研究期、日本に呼応した日本研究期、そして現在の日本研究期である。

一、公式な関係が始まった二十世紀に入る頃から一九六〇年代後半までが第一時期である。

二、第二時期は「冷たい戦争」による政治的、知的雰囲気が直接、また間接的に関連して地域研究の一つとしてアジア研究が行われるようになった頃である。アジア研究所、政治科学部、チュラロンコン大学が創設されたのはこの時期である。キエン・テラヴィットが日本や中国に関する本が主要な大学のテキストとして現れた。

三、第三時期は一九七〇年代前半に始まる。その頃、タイと日本の間で日本の投資や貿易赤字問題が現れ始めた。個別の地域としてまた結び付きのある地域として日本について関心が起こってチュラロンコン大学で試験的な研究プログラムができたのはこの時期である。そして一九七二年、日本製品不買運動が表面化した。

四、現代の日本研究期は一九八〇年代の初め頃始まったと考えられている。その頃、日本研究組織が研究施設の中に造ら

れた。そして一九八四年日本研究センタービルが建てられた。すでにその年、ここでASEAN諸国の日本研究についての国際ゼミナールが組織された。テーマは「強者と弱者の研究」であった。

チュラロンコン大学はアジア研究所のタイー日本研究プログラムや芸術学部内の日本語科を通じて日本研究についてあまり大きな位置を占めていない。

日本研究の現状について言えば、社会科学に関して、向けられている関心はいくつかの重要な焦点に分けられるだろう。それで全部網羅しているのではないが、三つの重要な焦点がある。すなわち、比較近代化と比較研究、タイー日本関係、そして発展のモデルとしての三つである。

III 比較近代化と「比較」研究

特に一九七〇年代の十年間このテーマについてのゼミナールがよく組織された。アジア研究所のタイー日本研究プログラムは日本基金の協力を得てまず、「タイと日本の現状の危機」についてのゼミナールをひらき、ついで、「タイと日本の比較研究の論点」、それから「比較研究の理論上、方法論上の論点」というテーマであった。その成果は出版されたものもあり、そうでないものもある。少なくとも言うっておかなくてはならない二つの出版物がある。一つはリクヒット・デイヤ

ヴェーギンの『明治維新（一八六八—一九一〇）とチャクラ改革（一八六八—一九一〇）比較的發展』とプラサート・ヤムクリンフングの『タイと日本の田舎の發展における社会学上の要素』である。両者とも近代化のパラダイムを用いている。比較上の要点は普通、教育、政治的指導、価値観、集団志向性等の現代化を可能にする潜在的要素について述べられている。一人は、全体としては、様々な前条件を求めることによって歴史であるようにみえる。また西洋と出会った頃の共通点を述べつつ、なぜシャム（タイ）は成功する道を取らなかったのだろうかと尋ねることで歴史であるようにみえる。もう一人は、明らかに焦点を歴史に関係ないものにおいて、つねにギャップがあるが現在の日本を成功した尺度として考えている。

IV タイ—日本関係

例えば貿易、投資といった経済面に特に限ったタイ—日本関係での問題点について表明したものによれば、一九七三年にキエン・テラウィットとステイ・プラサルトセットの研究がある。歴史的に重要な研究がある。例えば、ターヴェー・タヴェーウオンの『タイ—日本関係史』であり、最も総合的なものは石井米雄とK・ヨシカワの『タイ—日本関係六百年史』である。これはタイと日本の外交関係締結百周年を記念

して昨年タイ語に翻訳された。

V 発展国のモデルとしての日本

日本の發展をモデルにして学ぼうとする特に経済上経営上の面の研究がいくつかある。日本の経営や Quality Control Circles についての本があり、その他子供の読書や教育についての本もあり、例えば井深大の『幼稚園では遅すぎる』は翻訳され、それは高い売上高をみせた。今では翻訳家は日本で教育を受けた場合が多い。

サティアラ・パンサルナグシは一九三五年に新渡辺稻造の著作に基づいて『武士道』を書いたが、それは今六刷になって真面目に読まれているということは記述しておくべきであろう。中根千枝の『タテ社会の人間関係』は一九八二年に翻訳され印刷されたが、その頃ルース・ベネディクトの『菊と刀』が翻訳された。両方ともチュロンコン大学の IAS が行ったもので、批判的な編集者による序文がついている。福武直の『日本の農村』もまもなく世に出るだろう。かなり学問的なものだけでなく、もっと大衆的なものもいくつかある。例えば、Environmental Clubs の laeue がバンコクを中心にしたいくつかの大学からタイ語版が出版され、自主講座英語版『公害』からいくつか独自の記述したものから選択してそれに加えている。また日本にいるタイの留学生が書いた日

本で社会から疎外されている一群についてのもの、『日本の暗い一面』が一九八〇年に出版された。

こうした路線というか、こうした点に焦点をおいているということは、知的な組織や大衆の考え方を発展させるのに影響を与える思想面での役割をしているようにおもえる。意識的であれ、無意識であれ、日本研究センター所長である翻訳者の一人はエズラ・ヴォーゲルの『ジャパン アズ ナンバーワン』のタイ版のなかで次のような事を書いている。「この本（ジャパン アズ ナンバーワン）は読者なしにはナンバーワンにはなれない。というのはタイはASEANの中ではナンバーワンだからだ。」

VI 日本研究の認識面とイデオロギー的側面

ここまで、真空状態で行われているのではない日本研究を調べるに際して様々な見識を調べた。認識面を類別しようとするれば存在しているパラダイムを理解することになる。少なくとも、次のような三つの主要なカテゴリーが考えられる。

一、日本の競争。ここ数年の経済上の奇跡やヨーロッパの競争相手に対して日本経済が強いということは、すなわち「西を見ること」が望ましいことだということを示す。「西を見ること」とは実際にはこの一見近くて実際には遠い「アジアのモデルを見習うこと」で発展していくという「熟考する」「アップ

ローチを行うことを意味している。中学校や高校で用いている教科書の中には成功した日本を理想化しているものさえあって、若い世代を鼓舞しているものがある。そうしたものは、その過程で社会が払った道徳上の代償については全く無視している。

二、支配に対する観察、疑い、恐れ。こうしたことの多くは戦争によって経験する。特に現在の経済的支配の場合はさらに大きくなる。競争定位と対比することでよく分かる。競争の場には人間の共感の要素は力をもたない。時として日本人に対して「予測できない反応」を生むことになる。また日本と集団で競争しなくてはならないという意識を強化する。時に「われわれはどうして理論的でありえないのか」という言葉を促進する。

三、全く特殊なものではなく人間の住む国としての日本に対する関心。日本人、日本の民族、男性、女性を理解し、この人びとの理想や現実、成功と失敗、幸福と苦しみを分かろうと心から考えている。

こうした共感や見識は本当に必要としていることである。日本研究の方法は「熟考する」ことでも「日本人を研究すること」でもなく、違った文化をもった同じ人間を研究することである。

VII 日本研究を實際行う上でのパラダイム上の問題点。

一、日本研究が飛躍的に進んだにもかかわらず、単一の学問分野として行う従来通りの方法や日本を真似する方法を考えるという今流行の方法が出版されている本では圧倒的な量を占めている。しかしながら、こうした表面的な現象下では、これまでもあった、伝統的な疑問や傾向を今でも見ることが出来る。普通、日本研究はその限界がもつとはつきりしている点にまで来ているのだ。当然のこととして受け入れられている神話や普遍的な見解がある。研究者の中にもさらに一般の人の中にはもつと多く見られる見解であるが、例えば、タイと日本は同じ時期に、すなわちタイではチュラロンコン王の統治下、日本は明治天皇の時代に、近代化が始まった。しかしなぜ日本の方がタイよりも近代化が早く進んだか。タイと日本はいろいろな点でよく似ている。つまり、アジアの国であり、仏教徒の君主国であり、植民地になったことがない。

十七世紀初めのタイは高度な軍事技術をもっていた。歴史的例としてよく引用されることは銃や火薬を日本に送り、徳川將軍からは馬や剣が送られたということである。

日本に関する研究が現象上は進んでいること、建築物や施設といった基本的付随的なものが、とりわけ外的、内的要素の作用が含まれている。外的なものとしては日本から送られて

くる材料やその他のもの、内的なものとしてはタイの学問上のサークルや政策上作り出したメカニズムがある。

材料の基本構造を形成することは、本当に重要であるが、日本のタイ研究家に相談することはあまりなく、政治上商売上の手を経て行われることが多い。具体的な材料計画として決められることは、頭の中の計画になることが多い。そうした計画はもうすでにある知的基礎とうまく統合しない。内的要素、すなわち、本当に必要なと感じられていることの基本的事柄をほとんど考慮にいれていないという事実がまさにあり、その基礎をいろいろ準備することは解決するのにもつと時間やエネルギーを必要とする政治的行政面での障害を作り出している。

二、これまでの日本研究は学問上にのみあってかなり孤立したものだ。言い換えれば、支配的だったのは日本研究のパラダイムではなく日本学であって、かなり孤立したものであった。孤立した「盆栽研究」と呼ばれうるものであったと言えよう。

学問上の特別なグループが一方で大学内に確立されており、もつと一般的な人々の実際的で「全体的な」関心とは対立するものであった。もつと重要なことは通常の事柄を通常の分野で研究する学者の知的集団に常識が欠けていることについて卵―ヒヨコ問題がある。

これは部分的には時間要素に原因があると言えるが、部分的にそうであるとはかり言っではいられない。例えば、経済学者によるセミナーが毎年チュラロンコン大学やタマネサット大学で開かれていた。チュラロンコン大学アジア研究所では、そのプログラムはより政治科学や国際関係に基礎をおいたのもであったが、一方美術学科では言語や文学に基礎をおいたものであった。このように、知識の具体性はなお欠けたものである。

その結果、どれほど深く専門的なものであろうとも、日本を歴史的に理解することにしようとする広い見識を狭くしてしまった。

日本について高い関心をもっている今の状態は、タイの政治的経済的目的に原因があると言える。学問的集団は知的関心をもっている人々に積極的に応えることはできず、実利的な既成のノウハウに應えることに圧倒されているにすぎない。タイ研究から日本研究が孤立していることは地域研究が自己を写す鏡として機能することの妨げになっており、一般人の知的集団に対して積極的に相互に刺激を与えることの妨げになっている。

歴史的にみても、このことは研究計画の違いとして現れている。チュラロンコンの場合のように、まずアジア研究から始め、その後タイ研究になったものもあり、タイ研究から始

め、それからアジア（日本）研究になったものもある。いずれにせよ、そうした線に沿って多くの集団で意識的な努力が必要だったことは明白である。

三、タイの日本研究は知的な面で特にもっと力をもっていた西洋に（特にアメリカ人に）依存する必要があった。歴史的にそれは支持されていた。また部分的には勝つか負けるかの闘争をしていた黒人と白人の世界で冷たい戦争の一要素として機能していたように思える。本質的に善か悪かである必要はない外因的性質をもつ見識のために日本研究の第一世代は二次的要素に頼ることはできず、冷たい戦争の政治的関心とあったとすれば、知的標準が条件になることが多かった。

タイにおける日本研究とタイが直面している諸問題

そうあってほしいと思っているが、日本研究の第二世代は一次資料に多くのアクセスをもっていて、もっとうまく仕事ができるようになってほしい。しかし、孤立と学問的方向づけという性質や一般人で知的な集団が欠けているということに打ち勝つことはそれほど簡単なことではない。

日本の様々なイメージについての関心があつて、例えば、歴史学者E・H・ノーマンの『日本国の危機』が翻訳され、現代の反主流学派の批評家によって紹介されたものがある。例えば、カマタ・サトシの工場生活についてのものである。

四、発展パラダイムとタイとの関連

これまでの発展分析で主流になっている構造は現代化のパラダイムであり、その政治上、経済上の発展パラダイムである。これらは今もつとはつきりと現実化してきたが、説明するものが特別なばあいであることを現している。そうしたことがらの中で最も弱いところは、連中がヨーロッパ中心であることで、しばしばアメリカ中心であることが多いことである。あの意味で、いわゆる進歩的マルクス主義者もまた人間の進歩に対して民族中心主義人類的な考え方に基づいた直線的思考という流れがある。

日本を外的な、特に西洋のモデルで判断する知的な型を打ち破らなくてはならないという声がこれまでもあった。これはタイの学問の世界にとって反省がおこっていることを示す健康なしるしである。タイの学問の世界は「西洋」軸に対して一方的な対比をしていることが問題であると意識している。そして日本を知的探求の分野としてもっと真剣に取り扱

わなくてはならないという声がある。

しかも、日本について多方面にわたる実際の姿についてもつと様々な声があることを十分認識していないように思える。西洋のモデルを捨て去ることによって、成功したモデルをまねようとする思想上の直接的な誘惑によって、振子を揺する様々な力がある。極端な妄念である日本を「モデル」にするということについて様々な力がある。この種類の国内の方向づけはかなりうまく答えられており、かなり性急に進められているようだ。しかも科学―開化する人間の能力―を犠牲にしてそうなったことがよくおこった。だから、新しい「日本中心のパラダイム」のためにというよりもむしろ、我々が一層人間同士の伝達パラダイムのために一緒に考察し仕事をすることが必要である。そのために、パラダイムの推移が必要だけでなく、進行している理解に対する誤った二分法に打ち勝つことが必要である。

(白幡洋三郎訳)

コメント 田辺繁治

スリチャイ先生からタイにおける日本研究の現状及びいくつかの問題点について、指摘がありました。私自身は、特にスリチャイさんが指摘された比較近代化論という特殊な研究テーマについて考えてみたいと思います。社会科学あるいは人文科学の全域から見た場合に、なにゆえ比較近代化論というふうな非常に特殊なテーマに、タイの研究が固執していかなければならなかったのか、そういうふう

うに感じるのは、私だけではないと思います。その問題を中心に若干のコメントを加えるとともに、かつ比較近代化論的な考え、それをパラダイムとは別の概念として、むしろデイスコースの問題として、とらえることができるのではないかという可能性について、若干述べたいと思います。

スリチャイさんの指摘にもあったように、一九七〇年代というのは、タイにとって激動の時期であったわけです。社会的、政治的、

経済的にも、非常に多くの問題が山積みして一挙に吹き出した、危機の時代であったというふうに言うことができると思います。この七十年代の危機というのは、第一には政治の変化の時期であり、特に軍部独裁政権が腐敗し、非常に長期化した状態にあって、それに対する人々の非常に強い不満が爆発した時期です。しかも日本資本主義のタイを含む東南アジアに対する進出が、決定的な段階を迎えた時期でもあるわけです。そのような情勢のなかで、エモーションナルな対日感情、いわゆる反日感情が表面化し、それが政治的な行動として、日貨排斥運動にまで発展していくわけです。その危機のなかで、一九七三年十月十四日の学生革命が成功し、一応その段階で軍部独裁政権は打倒されたわけです。その後の三年間、いわば革命的情勢が存続し、さまざまな「民主化」運動が展開されました。しかし軍部、右翼の反革命は着実に進行し、一九七六年十月六日の流血事件によって、軍部独裁は再び確立されるわけです。その後、今日にいたる十数年間、軍事政権は日本にきわめて強く依存しながら、近代化・開発路線を押し進めてきました。タイにおける近代化論はそのような現代政治史のなかから次第に形をととのえてきたわけですから。

そもそもタイにおける比較近代化論の考え方は、先ほどの指摘もあつたように、アメリカで教育を受けた研究者、あるいは日本で教育を受けた研究者が中心になって展開されてきました。特に政治学や社会学の分野で非常に広く認められるようになってきたということが言えます。

そのなかでは、日本が、アジアの優等生としてモデル化されていきました。この比較近代化論は日本中心モデルとして形成されてきたわけですが、私はいくつかの問題点が、かなり初歩的なレベルからあるのではないかと感じます。

まず第一点は、日本の近代化をモデルとする場合に、いわゆる明

治期を日本近代の出発点とする見方が非常に強く、根深く定着しているということですが、明治期にたまたま対応するチュラロンコーン王の時代が主要な比較の対象になってくるわけです。そういう比較作業がはたして本当に可能なのか、つまり日本の近代というのは、本当に明治維新から始まるといつてよいのか、そうした根本的な疑問がこうした議論にはつきまといまいます。またそのようなむしろ主観主義的ともいえる対応関係の分析が、歴史学的な比較作業として成立し得るのかというふうな疑問も、当然出てくるわけです。

そして第二の問題は、たびたび指摘されるように、日本とタイの比較近代化論というものが、日本の近代化の過程を一つの普遍的なコースとしてみなしてしまふ危険に、常にさらされているということです。それによってタイの歴史のなかの独自なかつ内発的な展開へ目を向けることを弱めてしまふ結果をもたらすのではないかと、危惧されるわけです。

第三には、より根本的な問題が、比較近代化論のモデルには、常につきまといっているように思われます。いわゆる比較近代化論のモデルは、たとえば人類学における異文化理解とか、他者理解の観点と比較した場合、決して客観主義的なモデルとして構成されていないということに、注意しておく必要があると思います。

たとえばタイ人が異文化として日本を理解する、そして日本人がタイを理解するという文脈においては、それぞれの社会・文化の持つ構造と、それが経てきたプロセス、歴史的な過程というものは、互いに相対的なものであるという前提に立ちます。こうした比較のなかから、もしモデルが成立してくるならば、それはそれぞれの文化の持つ差異と共通性を理解するための論理をつくりあげていくことなると思います。しかしながら、比較近代化論の問題設定においては、そのモデルが理解のための論理ではなくて、むしろ主観的な理解の内容そのものであるという点に、大きな特徴であるわ

タイの日本研究がこれから発展すべきであるとはまったく考えません。ここでは、とりあえずタイの現在の社会科学研究の状況を眺めてみた場合、少なくとも比較近代化論的な考え方は、必ずしも中心ではないということを、指摘しておきたいと思います。そこにはむしろ、相対主義的な見方もあるし、そして普遍主義的な、あるいは反相対主義的な見方も、一九七〇年あるいは一九八〇年代に入っても、かなり強固に形成されてきている。古典的マルクス主義の議論はさておき、政治経済学、開発社会学、あるいは国家論を中心とする政治学や歴史学の新しい展開がみられます。さらに地方の民衆文化の可能性を、中央中心のこれまでの社会科学への批判として考えていく試み、あるいは異民族、異文化との接触といったヘトロジニアスな諸関係のなかから、文化というものを見ていくという試みも進展している。若干ファッショナブルな言い方をすれば、「脱中心的」な科学の実践スタイル、というものがあちこちに芽を出してきている。そういう社会科学の新しい流れのなかで、タイの日本

研究が、どういうふうに進展していくのだろうかということを考える必要もあります。今までの政府レベルの援助計画によって基礎を与えられ、そこに密接に依存した日本研究のスタイルと離れて、日本・タイ両国のさまざまなレベルの民衆的な交流を通して、さまざまな研究のスタイルを確立していく必要があると思います。

日本を研究する人の興味、それはさまざまだと思います。これまでの伝統的な諸科学のテーマはもとより、そこにはおさまらない、これまで非学問的と思われていた多くの対象やテーマもあると思います。たとえば、日本女性の研究、日本的医療の研究、エコロジー、天皇制、日本の労働観など人文・社会科学の広い分野にまたがるトピックが、タイの若い人々の関心をとらえています。こうした、むしろ拡散したトピックが、今後のタイの日本研究のなかから出てくるであろうし、そうした拡散した研究スタイルを、われわれはもつと理解していく必要があると思います。

上山 どうもありがとうございます。いまコメントイターからご発言のあったことで、日本の近代化というものを明治維新からスタートさせると考える点に、いろいろ問題があるのではないかと指摘は、日本の近代化というものを一つの大きなテーマとしていく日本研究にとっては、非常に重大な問題点のご指摘かと思います。その点で、江戸時代と近代化のかわりを共同研究などで深くやってこられた大石先生に、まずコメントをいただけたらと思うんですが。

大石 まず近代化という言葉の使い方、これはいろいろありまして、そこらあたりの決め方が必要だと思いますが、私の立場で言いますと、明治維新になって初めて日本が近代化したというのは、全然事実と反するだろうと思っています。私には日本の近代化の出発点というのは、信長、

秀吉、家康の段階にあつて、少なくとも文化史とか精神史的な意味では、江戸時代にその条件は整っていたんじゃないかと考えております。

どういふようなことでそう申し上げるかと思しますと、昨日の所長の報告で、親鸞の宗教の問題が出てきましたが、その親鸞が日本の宗教家として、また思想家として、非常に特異であり、その後の日本を規定したといふような側面があつたとは思ふのですが、やはり宗教というのは非合理的な側面と言いますか、精神に即する側面がございまして、近代化のコースとは相入れない側面があると考えます。

そうしますと、近代化の上では宗教からの人間の自立ということが、どうしても必要なわけで、そういうような面からいいますと、大体近世の初め、江戸時代にはそういうようなものから離脱している。宗教からの離脱

という観点からみますと、ヨーロッパは近代化が早かったと言いますが、少なくとも十七世紀の半ばぐらいといえますから江戸時代の前半までは、ヨーロッパではまだ魔女狩りが行われていたり、それから宗教戦争が斗われていたりしまして、その時期が日本より約一世紀遅かったような気がするわけです。そういう意味では、基本的には日本の近代化の出発はたいへん早かったと考えるわけです。そういう理由で、たとえば日本人が江戸時代の段階で、恐らく世界で例がなかったと思いますが、一般庶民まで字を讀み書きすることができたとか、また算数がそろばんを通してできたとか、そういうような形になって現れているということとして、近代化が明治維新からというのは、私は賛成できない。ただし、日本の歴史家が全部そう思っておられるかどうかは、これは全然別でございしますが。

山本 私は経済史をやっておりますが、経済史の分野でも必ずしもみんながみんなそう考えているというわけではないんですけれども、私たちはいま十九世紀を勉強しようという小さな研究会を開いておりますので、そこで私たちが考えている経済の近代化という点でいうと、どうも日本の場合には十九世紀の初頭ぐらいからいけば内在的な近代化が始まっていると考えられるのです。

私たちは経済の近代化を二段階に考えていて、西洋的な近代化とそれから内在的なインディジナス(indigenous)な近代化というふうに、二段階に考えています。経済の近代化は、日本の場合ごく簡単に言いますと、市場経済的なメカニズムが隅々まで経済のいろんな面で現れてくる、あるいは経済政策といったようなもの、たとえば貨幣政策といったようなものが社会の中に浸透するという、そういう意味でいうと、どうも十八世紀の終わりにから十九世紀の初頭には、もうすでに日本ではそういう状況が成立していた。それを私たちは内在的な近代化だというふうに考え、その上にいわば西洋的な近代化が開国以降乗ってくるんだというふうに考えています。

その意味で、日本の経済の面で見ても、近代化はかなり遡って考えたほうがいいのではないかというふうに思うわけです。

中根 スリチャイさんにおたずねしたいのですが、東南アジアの国々では、非常に共通性があると思うのですが、インドネシアとかほかの国々と比較して、タイの日本研究の特色というのがありましたら、簡単に説明いただきたいのですが。

スリチャイ 中根先生のご質問に対して、十分にお答えできないかと思えますけれども、八十四年にインドネシアの日本研究の方々が国際シンポジウムのときに見えましたけれども、インドネシアの日本研究は、まだ一種の世代別になっているかと思えます。それから少し制度的にまだインドネシアはさきまでして、研究会的な感じもなかなか少ないという気がしました。個別的にいい研究もあるかと思えますけれども、全体的にはそういった印象です。

ネウストプニー パラダイムという言葉は、発表者もコメントターもお使いになりましたけれども、パラダイムという言葉は、一般的に一つの割とはっきりした特徴を持っている体系という意味で使うのと、それともうちよつと狭い意味で使う場合があつて、後者は、クーンのパラダイムに近いものになると思います。クーンのパラダイムは、一般的な知識になって来っていますが、それは学問が段階的に変わるという意味ですね。その意味のパラダイムは、日本研究の場合には、ヨーロッパではジャパノロジー、日本研究型パラダイム、それから最近の現代型パラダイムと、三つの段階があるといわれています。その意味のパラダイムで言えば、タイの場合にはどういふふうになっているかですね。

たとえば私が一九八四年にタイにお邪魔したときには、大学では歌舞伎ばかりやっているというような話がありました。それは詳しくは調べなかつたのですが、ジャパノロジー的なアプローチではなからうかというふうに感じました。この意味のパラダイムが底流としてどれだけ存在して、どれだけ意味を持っているかということは、私のフレイムワークの中では、非常に大事な問題なのです。

それからもう一つは、先ほどの発表のときには十分に言えなかつたタイ

プのことですけれども、機能的タイプというものもあります。それは一定の目的を持った日本研究というものです。そういうこともあるのではないかと思います。それは東南アジアの、それからタイには、その要因が非常に強いのではないかと印象を受けましたけれども、いかがでしょうか。
スリチャイ 僕自身はタイボロジとしてのパラダイムという意味で、パラダイムという言葉を使いましたんですけれども、しかし先生がおっしゃったような、学問の発展段階的な意味でのパラダイム、つまりジャパノロジー型パラダイムとか、日本研究型パラダイムとか現代型パラダイムといった研究の仕方は、いまのタイには同時に存在しているように思います。分野別に強い弱いがありますけれども、たとえば歌舞伎を研究している方々とか、社会科学の場合はパラダイム性は強いけれども、しかし専門的になってしまった経済学とか、人類学ではパラダイムの展開といったことについて、共有する意識は強くないと思います。

しかし大学の外の人々の日本への理解には、割とはっきりした傾向があり、日本はどうしてあのように早く経済成長したのかというような実用的なパラダイムみたいなものが強くなってしまっています。たとえば日本の経営の仕方とか、そういうことの内実の説明を求めるといったようなことです。

三つのパラダイムが同時に存在するといいましたけれども、それぞれが今の日本に対する理解に関して、あまりにも別々になっているというのか、日本の一側面しか強調されていないという点が、心配すべきところかと思えます。だから国際交流とか文化交流とかによって、もっとお互いの人間社会の理解を深めていくようにしなければ、今のようでは、日本研究は盛んでも、それがこれから十年二十年先にどう貢献できるかは、心配されるかと思えます。

上山 先のネウストブニー先生のご質問で、機能的タイプということが出てまいりました。その趣旨は、先ほどコメントイターの田辺さんから出ましたデイスコースというところと交差してくると思うのですが、そう

いう点で、先生からのご意見を追加していただけますでしょうか。

ネウストブニー デイスコースという概念は、非常に大事な概念だと思います。実は、最初にこちらに提出するペーパーの計画では、デイスコースとしての日本研究というような題にしようかとも思っていました。ただ、その場合には、別の言葉に翻訳することだけではなくて、もう少し別のフレームワークをつくらなければならないと思います。私が今日お話ししたフレームワークの中では、タイプというようなことと同じようなことになるかもしれません。ただ、デイスコースといいますが、フーコー自身の場合には、これは言葉遣いと言いましようか、本当のデイスコースのことか、それとも思想的な問題とか、社会体制の問題も入っているかどうかということがはっきりしていないように、少なくとも私はフーコーを読んでおります。

日本研究のタイプにはいろいろな要素がありまして、その一つは、探究の方法ですね。それからもう一つは、研究のデザインとか、研究のアプリケーション、それから社会体系、そのほかにはイデオムというものがありますけれども、デイスコースはそれの中でイデオムというところに一番近い。ですからデイスコースを非常に広く解釈して使ったら、これは大変結構なことだと思います。

李 いまチームの問題でフーコーとおっしゃったんですが、本当はデイスコースはバンベニストが一番初めに使った言葉ですね、それと同時にパラダイムということも、もともとはシンテクマティックの反対のパラダイクマティックの意味でしょう。クーンの話はなまりですね。クーンのパラダイムは、社会科学では使いますけれども、記号論、また文学批評などでは、クーンのパラダイムとは違った使い方をします。私の常識では、デイスコースと言えば、ラングみたいな体系じゃなくて、現実にも現れたパロールのことなのです。ですから、パラダイムは同時的にみるけれども、デイスコースは時間的にみるわけなのです。ですから、いま論争するためには、まずキーワードのコンセプトがないとだめなのではないでしょうか。

それから、パラダイムを第一、第二、第三の歴史的進歩だと言え、欧米では確かにそう言えるけれども、韓国とかそういう第三国では正反対になつてゐるわけなんです。そういう国では、日本に欧米よりも優秀な企業が出てきたので、どうして日本がこんなにやり遂げたのかということに関心を持つわけです。そうすると全体的なジャパノロジーみたいなものにどうしても向かうようになってくる。考古学とかそういう研究は、むしろ昔にあったのです。逆になつてゐるのです。だから東南アジアとか韓国で言えば、もともと欧米とは日本に対してインタレストが違いますから、正反対になつてくるのです。昔に学問的な、むしろポスト・モダン的なものがあつて、いまは逆に追いつけ追いつけない問題が出てきて、そこからジャパノロジーみたいな総合的なものになつてくる。

こういうことから、二つを整理しなきゃだめだと思うのです。日本研究の歴史を欧米的に見たときの発展の仕方と、タイみたいに東南アジアの国からの日本研究の歴史の区別。そしてパラダイムの話とデイスコースの話。この両者がからみあつて、ちょっとクリティカル・タームが乱れておりますので、その限界を明確にしたほうがいいと思うんですけれども。上山 おっしゃるとおりだと思います。パラダイムという言葉は乱用される危険がある。今年度のシンポジウムのテーマの中にパラダイムという言葉が入ってますから、いまご提案のとおり、少し煩瑣な感じがしても、ある程度こたわつてみたほうが、いいんではないかと思ひます。

田辺 それほどデイスコース、パラダイムについて、深く研究したこともありませんが、李先生およびネウストプニー先生からクリティカルで重要な指摘がありましたので、それを含めまして、私の考えを述べさせていただきます。

ネウストプニー先生がいきました、機能的なタイプとしてのパラダイムは、タイの現在の日本研究のなかで、やはり中心的な位置を占めてきてゐるのではないかと思ひます。それは、特にここ十数年の間に急激に出てきた日本近代化論を中心とする研究において、目立つ点です。

そしてタイの日本研究がなぜパラダイムではなくて、デイスコースなのかという点が問題です。タイの日本研究の現状を見ますと、非常にダイバースしてる。スリチャイさんはそれを個別化してるといふ方がいいました。たとえば日本の近代化を研究している人、日本文学を研究している人、日本政治史を研究している人、そして日本経済を研究している人のそれぞれのステイツメントを個別的にとつてみた場合、なにか統一的な方向に向かつてゐるといふふうには、一見しては見えないわけです。

しかしながら、そういう個々のステイツメントはたがいに矛盾したり、また非一貫的でありながら、ある程度の許容できる巾をもつてなにか日本の研究なんだというふうな感じを帯びてゐる。研究者自身の間には、それぞれのディシプリンや学問伝統とは別に、やはり自分たちは日本の研究をやつてゐるんだというコンセンサスができあがつてきてゐるわけです。このコンセンサスは拘束的なものです。文学であらうと、政治であらうと、経済であらうと、日本研究は西欧・アメリカとの暗黙の比較、そして自らのタイとの比較の枠にはまつてゐるわけです。日本研究はニューギニア高地民、アフリカの諸部族やインドの社会や文化との比較という科学が本来的にもつラディカルな視角を失つてゐるのです。そこでは普遍性の視野が排除され、日本という特異性への視点が肥大化してゐます。この特異性へのめりこみが、単に研究者のみではなく、タイ社会全体のなかで進行していく点が問題です。それを私はデイスコース形成の第一の条件であると思ひます。

第二は、デイスコースをめぐる問題として、最も退廃した形のデイスコースというものを想定しなければならぬと思ひます。それはドクサ化してしまふ危険性です。自分たちはプラクティショナーとして日本研究をやつてゐるけれども、ただ、とにかくやれば何となく成果が出てきて、何となくうまくいふ。つまり、自分たちの日本研究のプラクティス自体が、極めて自明なものとして見られていく。疑いもなく自分たちは何かやつて、とにかくうまく結果が出てくる。デイスコースというのは、そういう

枠に入ってしまう危険性を常に伴ってゐるのではないか。タイの日本研究のなかで、特に近代化の研究というのは、そういう危険性にさられてゐるという気がします。昨日のレヴィ・ストロース先生の言葉で言えば、「ロゴスの眠り」、あるいは「ロゴスの退廃」につながるものではないかと思ひます。

そして第三番目には、これは本当はかなり詳しい実証的な議論が必要だと思ひますが、そういうデイスカーシップなプラクティスは、いわゆる制度とか慣習と非常に密接な関係にあつて、そのなかでむしろ無意識的に再生産されてゐるんだという点です。日本研究をめぐる情報の処理やあつかい方だとか、学術出版、教育システム、特に語学教育などを中心とした、そういう日本についての知識の再生産構造というものに、注目していかなければならぬと思ひます。したがつて、デイスコースという概念を使う場合には、そういう再生産のところまで目を向けていかなければならぬわけですから、この再生産の問題というものが出てくるからこそ、日本研究あるいは日本に関するデイスコースが、政治化される可能性を常に持つてゐるということ、肝に銘じておかなければならぬのです。

芳賀 今の田辺さんの二番目のコメントは、研究者にとって非常に耳の痛いところがあります。たとえば日本における日本研究ですね。日本における国文学や国史研究、これはまさにロゴスの眠りと言へる面があるかも知れません。それから日本研究だけじゃなくて、日本におけるドイツ文学研究とか、日本におけるフランス研究なんていうのは、本当に決まつたルーティンの中で、プラクティスの繰り返しをやつてゐる。だからこうやつて外国における日本研究のことを考えることは、つまり日本における外国研究の問題にもすぐにつながつてくるんだという気がいたしました。

今申し上げたことは、それだけのことでなくて、先ほどのスリチャイさんの報告でも、それから田辺さんのコメントの中でも、比較近代化論が非常に旗色が悪かつたのですが、しかし、タイの日本研究のことを考える場合は、これはやっぱりあつてもいい問題ではないかということに関連す

ると思ひわけです。タイの日本も十九世紀の歴史を通して考える場合は、さつき李さんもちよつと言つたけれども、同じような運命にあつた。一方は幕府を、あるいは天皇制をかかえ、一方はチュラロンコン王朝といううなものがあつた。それが十九世紀後半からのあの国際関係の中で、どううふうに変化していったか、どううふうな運命をたどつたかといううなことは、非常に普遍的な問題たり得るわけであつて、だから比較近代化論というのは、田辺さんのおっしゃるように、方法論的にも、それから非常に主観的なアプローチが強くなるとか、そういういろいろな問題点はあるだろうけれども、しかし、タイの人から見れば、非常に強い日本研究へのモティーベーションたり得る、今だにモティーベーションたり得るのではないかと思ひわけです。

いろいろ方法論的反省があつて、学問が変化し、進歩していくという面はあつても、しかしやはり外国研究の場合には、どうしてもその根元には、あそこがおもしろいからやつてみたいという、そういう個人的な強いモティーベーションがなきやいけないわけで、チュラロンコン王朝時代と十九世紀日本の比較といううなことは、非常に強いモティーベーションたり得るのではないか。それから日本側にとつても、非常におもしろい成果が、タイ側の研究の中から出て来得るのではないかと思ひます。たとえば日本の天皇制の持つていた役割についての、日本国内だけでは見通せないその意味を、タイの側から照射し得る。それから王朝といううなものがなかつたマレーシア、あるいはシンガポールにも日本研究はありますが、そういう国での日本研究とタイの場合は違ひ得る。だからある程度主観的な要因が出発点になれば、やはり日本研究は研究として力を持ち得ないんじゃないかというふうにも思ひわけです。

いまパラダイムとかデイスコースといううなことで、非常に議論が高尚なほうに進んでおりますけれども、しかしやはり基には、研究者個々の興味の発動原点といううなものが、考えられてしかるべきで、その場合、タイの側から見れば、こういう比較研究というのは、まだ十分意味を持ち

得るのではないかというふうに思う次第です。

吉田 私がおもうと思ったことを、芳賀さんが言われたので、一つだけ付け加えておきたい。比較近代化論については、確かに田辺さんの批判のとおりで、それはかつて日本の研究者がよく言ったように、日本とイギリスの産業革命を比べるという話ならば、最初からかなり両方の枠を決めて議論が成り立つ。しかしアジアの中の比較近代化論は別の視点が必要になってくる。つまり、日本とタイ、あるいは日本と中国、日本と韓国、いずれも常にお互いがファクターになっているわけです。日本は絶えず中国を意識しながら、近代化を進める。中国も同じ、韓国も同じであった。お互いがお互いを視野に入れつつ、それぞれの近代化が進行していたわけであり、このような場合、その研究の方法にはヨーロッパを対象にするときと非常に違った意味が生じて来ると見なければならぬ。その意味では、私はむしろ、比較近代化論を一律に考えてはならないと考える。そうすれば、アジアにおける比較近代化論は、新しい問題を展開する可能性が十分にある。